

児童健全育成賞（数納賞）佳 作

インクルーシブ学童保育

—みんなちがってみんないい—

山梨県中巨摩郡昭和町

げんき夢こども園 主幹保育教諭 高 野 はるみ

1 はじめに

『げんき夢保育園』ってどんなところ？

放課後児童クラブ『ゆめくらぶ』の母体である『げんき夢保育園（平成30年に認定こども園「げんき夢こども園」に改名）』は同敷地内に小児科クリニック『げんきキッズクリニック』と共に平成21年4月誕生した。理念に『お子さんを中心にご家族の心と体が元気でいられるようクリニックは医療面で、園は保育面で子育てを支援します。』と掲げそれぞれの専門性を活かし連携して子育て支援をしようと立ち上げられた。この時はまさか6年後に放課後児童クラブを立ち上げることになるとは誰一人想像もしてなかった。ただ小児科クリニック併設ということは全国的にも珍しいことだったようである。そういった環境からか、見た目ですぐわかる身体的障がいの子、見た目ではわからない発達の何らかの支援が必要となるだろう子やアレルギー対応が必要な子等々様々な配慮が必要な子が入園してきている。立ち上げの年から気管切開をしているお子さんを受け入れ、クリニックと連携してのスタートとなった。（のちにH21. 9病児保育室『ドリーム』、H27. 4放課後児童クラブ『ゆめくらぶ』、H28. 3医療的ケア児日中一時預かり施設『スマイル』、H30. 4子育て支援センター『ながれ星』、R 3. 4一時預かり保育『にこにこくらぶ』設立）

また、在園中に保育する中で特に発達が気になるお子さんを発見し、園長先生の助言の元、

保護者と面談を重ね専門機関に繋げるということにも力を入れてきた。こどもも保護者も安心して就学を迎えることが、園でできる最大の仕事と考えていた。集団だからこそわかる子どもの違和感を出し合い共有する。日々の保育の中で保育士が少しずつ身に着けてきた力と、毎月の職員会議の中で行う園長先生からの研修で得た知識を活かして。併設のクリニックの院長先生が園医で年3回の健康診断を行っている。保育士が日頃感じているその子の発達のでこぼこや、生活しづらさをお伝える。院長先生には体はもちろん、発達の面でも診ていただき、必要となれば保護者に伝えて専門機関に繋げるといった流れで支援してきた。

初めから『インクルーシブ』を意識した訳ではなく障がいの有無に関係なくその子がその子らしく生きていく為のすべを職員みんな考えていた。気づけばそれが『インクルーシブ保育』ということで『インクルーシブ学童』の元となる。

2 放課後児童クラブ『ゆめくらぶ』誕生にいたるまで

平成26年度の卒園児の中の3名の子が誕生のきっかけとなった。1名は当げんき夢保育園立ち上げの年に0歳で入園してきた子。1名はその翌年1歳で入園してきた子、もう1名はそのまた翌年2歳で入園してきた子（この子は初めから保護者が発達に不安があると話されていた。）

と同じ年齢の子たち3名だった。

集団保育の中でこだわりが強い、落ち着きがない、切り替えが難しい、コミュニケーションが苦手である等がみえてきた。半面、自分が好きなことに関しては非常に詳しい、活動的である、優しい心を持っている等という面もあった。立ち上げの直接のきっかけはこの3名だが他にも数名このような子がいた。

保護者にお話をしてすぐ受け入れられることなどほとんどなく戸惑われたり、不安になられたり、時には聞くに聞き難い言葉を投げかけられたり、数か月拒絶されるといったケースもあった。その度に『子どもの為』と言いつけさせた。このような心労が大きいことを一人だけの担任に任せることは到底無理な話で、クラス担任も複数名にしたり、職員会議で情報共有して『チーム保育』で取り組んできた。そしてその3名の子にもそれぞれの確定診断がついた。

そこまでの道のりは決して容易いものではなかったが保護者との信頼関係ができたことは確信できた。診断を受け保護者が共通して言われたことは、「育てにくさを感じていたのはその為だったのですね。自分の育て方が悪かったのではないとわかりほっとしました。」と。改めてどれだけ大変な思いの中で子育てだったのか痛感した。

そこからは保護者と二人三脚でその子がその子らしく生きていけるような工夫を関係諸機関とも連携して支援してきた。時には不安になったり、迷ったり、共に泣いたり笑ったりしながらあつという間に就学を迎えた。

昭和町には3つの小学校があり、その子たちも一人ずつそれぞれの小学校への入学が決まった。より丁寧な申し送りをして通常級か支援級か等々教育委員会や小学校とも話し合い、準備を進めていた矢先のことだった。小学校に隣接の学童保育へ申し込みをだしたところ受け入れてもらえなかったと3名の保護者がそれぞれに園長先生を訪ねてきた。

保育園に子どもを預けていた保護者なのでみなさんもちろん共働きである。1年生のころは

2～3時間で帰宅ということが当たり前だ。

「このままだと仕事が続けられなくなってしまい困ってしまいます。どうしたらいいでしょうか。」と不安いっばいな表情で涙ながらに話されていた。もちろんこのまま黙っている園長先生ではない。すぐに町に連絡を取り、それぞれのご両親と町へ受け入れのお願いに上がった。

『昭和町』という町は全国の住みたい町ランキングの上位に入るような住みやすく、特に子育て世代に優しいという人気な町である。定型発達の子でいっばいで診断のついているお子さんの受け入れはすぐには難しいという答えであった。そうなれば次の手立てを考えなければならない。今でこそ放課後デイサービス等も数多くあるが、当時はそれもないに等しいくらいだった。

院長先生も園長先生（ご夫婦）もともに、困っている保護者の声にこそ耳を傾ける方でその声が小さければ（数が少ない）小さいほど研ぎまされた『耳』でその声を拾い上げる方々である。目の前に困っている人がいるならばなんとかしよう！ということでそこから見学に行かせていただいたり、町とも相談させていただきながら準備が始まった。当園は3つの小学校の丁度真ん中あたりに位置している。車でお迎えに行かなくてはならない。最小限の予算の中で車を調達し、次はドライバーさん探しになった。お迎えの時間だけとなると現役を引退されたような方で子どもを好きなことはもちろん、願わくば子どもの発達にも少しでも理解があったらありがたいと探していたところ園長先生の人脈で何とか見つけることができた。職員は当園の保育士をと考えたが小学生となると未知の世界である。十分な準備をするにはあまりにも時間が足りなくて取りあえず子育て経験がある職員数名がローテーションで入るよう配置した。バタバタの中、平成27年4月お母様方が仕事を継続するために子どもをたちが安心して過ごせる場所が欲しいという切実な願いから、昭和町の委託を受けて放課後児童クラブ『ゆめくらぶ』が誕生した。心身ともに障がいがあったり、何

らかの配慮が必要な子どもたちは、様々な環境の変化に対応できずストレスを抱えることも多い。『ゆめくらぶ』は、ありのままの自分を出せる環境であることを目指してスタートした。

3 スタート

立ち上げの年は発達障がいの子1年生3名と定型発達の1年生2名、2年生1名の6名で『インクルーシブ学童保育』としてスタートした。子どもたちも職員も右も左もわからないままのスタートだった。保育園ではその子がその子らしくということに強制して何かをさせるというようなことは一切せず『見守る』、『待つ』ということを大切にしたい。そんな環境の中で成長してきた子どもたちである。小学校の『集団』に重きを置く生活で頑張り、時には頑張りすぎてしまいランドセルにまるで『おもり』でも詰め込んで帰って来たかのような重い足取りの日もあった。とにかく一人ひとりがそれぞれの方法で自分を一度リセットしてこの『ゆめくらぶ』の生活に入る。宿題をするかしないかから始まって、自由時間の過ごし方、おやつの時間、掃除の時間等一定のルールはあるが、全て子どもたちと話し合いをしてその子が自分で決めて行動に移せるよう見守る。

また、3つの小学校に1台の車でドライバーさんと保育士が迎えに行く。お迎え時間はほぼ3校とも同時刻である。当たり前だが3校とも待たせずに迎えに行くということは瞬間移動でもできない限り現実的には無理な話だ。「〇〇小学校です。お迎えまだですか?」「今日は会議なので見ていただけません。」等と毎日のように電話対応に追われ、1年目は謝罪しながら、その日その日をなんとかやりくりしてきた感じだった。これを何とかしないとこの事業を継続できないし、何よりも子どもたちを安心安全に預かれないことは絶対避けたいと思った。小学校に事情をお伝えし、理解いただけるよう努力、工夫をした。あらかじめ3校に出向き、年間の予定をお渡しして、4か月毎最初に迎えに行く学校、2番目、3番目と平等になるようにして

それぞれをお願いをした。時には集団下校でお迎えに行く前に帰ってしまった等、大小合わせればほぼ毎日のようにいろいろな課題があったように記憶する。時間は要したのが何年か経つうちにそれも減ってきた。迎えに関して課題がすべてクリアした訳ではないがご理解いただいた小学校には感謝申し上げたいと思う。

4 A君の12年の歴史

立ち上げのきっかけになったお子さんについて振り返ってみたいと思う。先ずA君。この子は0歳児クラスへ保育園立ち上げの年に入園してきた。立ち上げの年とはとにかく園児を確保しなければならなかった。今は昭和町のお子さん以外は入園できないくらい厳しくなっているが当時は定員に達するよう町内外問わず受け入れをした。この子も広域入所という形で町外から通われていた。ご両親とも園に対して協力的でお二人で一生懸命子育てをされている印象だった。この子はとても明るく元気いっぱいな子であった。

年齢が進むにつれて興味を持つもののこだわりや偏り、またなかなか言葉が出ず、それゆえの友達とのトラブルもあった。2歳児クラスになってからご両親に気になっていることをお伝えした。時間はかかったが、子どもの為になるならと受け入れていただき、県の専門機関へ通うようになった。年長になってからは苦手なことを極力減らして就学を迎えたいというご両親の思いと園の願いが合致して地域の『ことばの教室』にも週1回通うようになった。園での様子をお伝えしながらそちらでの様子も伺うといった形でスタートした。私も1度見学に行かせて頂いた。さすがに専門家の方とあってその子が楽しみながら学ぶ姿が見られ確実に伸びもあった。それぞれの専門性を活かし、連携することの大切さを身をもって感じた経験となった。

また、前輪と後輪が同じ方向へ進むからこそ車も前へ進むのであって、子どもも家庭と園が同じ方向を向いてこそ、その子の心身ともに健やかな成長があるのだと確信でき、改めて保護

者との関係の重要性を実感した。

その子の得意なこと、苦手なこと等々丁寧に小学校へお伝えして就学を迎えた。担当して下さる方の感性や価値観でも捉え方が随分変わってくるものだと感じたこともあった。お迎えに行くと明らかに何かあったのかなと思うことも度々あった。一方で顔を赤らめて『恋話』をしてくれることもあり、着実に成長していることが伝わってきた。とにかくこの子がこの子らしく『ありのままの自分がいい』と思って生活できるようにご両親も必要に応じて学校へ出向いたりしながら、一緒に考え、悩み、時には涙したり、笑ったり…そんな毎日だった。

また毎年運動会には学童の職員と3つの小学校へ観に行かせて頂くのが恒例になっていた。学童では見せない雄姿を観るのが楽しみだった。6年生の最後の運動会では応援団ということで真面目なA君らしく真っ赤な顔で仲間を大きい声で一生懸命応援する姿に涙が止まらなかった。

保育園から一緒だったお友達とバスケットも始め、大変ながらも手助けを感じている様子にこの子が自分の足で歩きだしていると嬉しくも、少し寂しくも感じた。心身ともに大きく成長したこの子が今年3月に小学校卒業を迎えた。4月、同期の仲間とご両親方も一緒にぶかぶかだけどっても素敵な学生服姿を見せに来てくれた時は感無量だった。赤ちゃんから学童での生活までが走馬灯のように巡った。そして幸せに思えたことは、どんな時もいつもご両親と心近くいられたこと。このご家族からはたくさんの学びをいただいた。

5 B君のお母さん

二人目のお子さんはB君とする。1歳の時に入園してきた。物静かな穏やかな感じのお子さんだった。2歳前くらいからこだわりが強く、何か興味のあることに集中すると周りが見えなくなってしまうようなお子さんだった。やはり、ご両親ともに、受け入れ難いようであった。お母さんはご自身でも育てづらさからいろいろ調べたりしていたようであった。お母さんと共

に研修に参加したこともある。この時に、園の言うことはその通りだと思うし、すべてわかっている。だからこそ、自分の子となると難しいとおっしゃっていた。そして「子どもと二人でどこか行ってしまおうかといけないことを考えてしまったこともある。」と涙ながらに話された時は、私自身もどう言葉をかけていいのか分からず、自然とこぼれてくる涙をこらえながら「うん。うん。」と聞くことしかできず、強い無力感を感じた。

園長先生と面談の時はご両親でいらっしゃることになっている。お父さんにもお父さんの葛藤があったようで、見通しを立て、何回か面談を重ね園長先生が丁寧に二人の気持ちに寄り添い関わらせていただいた。専門機関で確定診断がついた時は、また別の感情があったことと思う。私などには図り知ることなど到底無理な事と理解した。それでもどこかほっとしたような安堵感漂う姿に園長先生の相手を包み込んでしまうような温かさ、偉大さを感じた。

B君は『虫』に関しては群を抜く物知りで虫の事ならお友達も職員も何でも聞いていた。いつからか尊敬の気持ちから『虫博士』と呼ばれるようになった。この呼び方を気に入り、誇らしそうにするこの子の笑顔が印象的であった。

当学童で3年程過ぎすうちに周りの地域ですごいスピードで『放課後デイサービス』が開設されていた。このお母さんはこの子の特性をしっかり受け入れていて、当学童と平行して通えるところを探されていた。1年半ほどは平行通園しながらそちらへ移動する事になった。「子どもは楽しみのようだけど親の私たちはここを離れる不安がある」とおっしゃってくださった。そして「ここがあったから今がある。」と、という言葉から学童保育を立ち上げたことに意味があり、私達には役目があると改めて思った瞬間でもあった。また、「先生もし、同じようなことで悩むお母さんがいたら是非、私を呼んで下さい。私の経験をお話しますよ。」と。沢山の山を越え、谷を渡ってきたお母さんが、そんな風に思ってくださいていることに、万感の思い

と心強さを感じたことを思い出す。

この子は卒業までの在籍ではなかったがご両親がこの子の障がいを受け入れるまでの葛藤と、受け入れてからの数年のこの子の成長を共にみさせていただけただことは多くの学びとなった。

今年3月卒業したB君が、4月に入って少ししてお母さんと一緒に大きめの学生服に身を包み久しぶりにお顔を見せに来てくださった。自宅から中学校まで距離があること。自転車通学になること。自宅と中学校の丁度中間地点に当園があるので困ったことがあった時はここに寄るよう話したので助けてくださいという内容だった。こことはしばらく離れていたのだが親子にとってここがそんな存在であることがとても嬉しかった。

6 C君の家族の絆

3人目のお子さんはC君とする。2歳での入園であった。入園前の初の面談を園長室で行ったのだがその子は視覚に入るもの全てに興味を示し一時として止まっていなかった。とにかく活発な子だなあという印象だった。お母さんも育てにくさを感じているようで町等に相談されているとのことでの入園だった。給食と午睡の時間以外はずっと動き続けるようなお子さんだった。

そして『一番』にこだわり、並ぶことはもちろん、靴を取りにいくのもトイレに行くのも給食を食べ終わるのも…とにかく『一番』でないと気が済まない。それ故のお友達とのトラブルは日常茶飯事で、その都度落ち着くまで待ち、向き合い、寄り添うということが続けてきた。切り替えの難しさもあり、ご両親の困り感もあったので早めに専門機関に行かれ確定診断がついた。

小学校は支援級で、相性が合わない子との関係性で親子で悩み、苦しむ姿を何回もみてきた。学年が上がるにつれて小学校での課題も増えてきて先生とうまくコミュニケーションが取れず…ということもあったようだ。学校側も難しさを感じながらもご両親と連絡をとりながらC君に

向き合ってくださいっているようであった。お迎えに行くとパーカーのフードを頭からすっぽり被り『話しかけないでオーラ』全開ということも一度や二度ではなかった。自分の思い通りにならない苛立ちやどうにもならないイライラを職員やお友達にぶつける。聞くに堪えない言葉を放ったり、手や足が出て…という時もあった。体も大きくなり、心身ともに疲れ切っているこの子を前に、職員が途方に暮れたこともあった。

しかし、自分の心が落ち着いてくるとバツが悪そうにはあるが、謝ることもでき、時には涙を流しながら反省している姿もあった。この子自身どうにもならない感情であったと思う。こういう思いは極力させたくない。この気持ち私達の原動力になっていたのかもしれない。また、この子が少しでも生活し易くなるよう居場所をたくさん作ってあげようとの思いからご両親もあちこちの放課後デイ等へ見学に行かれる等精力的に動かれていた。

そしてこの子にはふたりの妹さんがいた。ご両親が発達障がいに関してはとても意識の高い方々だったので、私達がお預かりしていた在園中はそれほど気にならなかった姉妹だったが早くから専門機関と繋がり、診断がつき、上の子同様に療育をされていた。私達にもそれがはっきりわかるようになったのは学童に入所して下さってからのことであった。兄、姉妹3人ともにそれぞれに特性があり、それぞれの食の好みから始まり、ありとあらゆることが三人三様であった。にも関わらずご両親はお一人おひとりを大切に育てられていることがいろいろな場面で垣間見え、真の親の『愛』を感じた。

そんなC君は確実に心も体も成長し、6年生になった時は学童に帰って来るなり、慕ってかれている2歳児の子の部屋へ行き、ダイナミックに共に遊んだり、大きい体を活かし園庭に横になって小さい子供達を乗せて遊んであげるなんてこともできる優しいお兄ちゃんになった。それを見ていた妹たちも高学年になるにつれ、年下の子から慕われ、頼りにされる優しいお姉ちゃんである。

そしてこの子を語る時に学童入所から6年間担当した職員の存在がある。D先生とする。職員の園内の部署移動もあったがC君と6年間関わったのはこのD先生のみだった。どの職員も対応に困る場面がある中、このD先生は違っていた。その子に対して、違うことは違うときちんと向き合っ、その子が気づくまで最後までとことん付き合うような職員だった。時には日をまたいでなんてこともあった。園長先生にアドバイスをいただき職員間で知恵を出し合いあれこれ試行錯誤したり、園外の発達障がいに関する研修にも足繫ぐ参加していた。この子がこの子らしく生きて行く為に今何をすべきかを常に追求しているようであった。そうはいっても心が折れそうになることもあり、そんな時は当園の最大の武器『チーム保育』でみんなで乗り越えてきた。

この子も今年3月卒業を迎え、4月のある日お母さんと、頼もしい学生服姿で妹さんをお迎えに来た時のことである。開口一番「D先生いる？」と。在所中は言いたい事が言え、素の自分を出せる存在だったD先生。本当に信頼し、C君にとってどれだけ大切な存在であったか確認できた瞬間でもあった。

またこの子のお母さんは、ご自身の経験が他のお母さん達の役に立てるならと当子育て支援センター『ながれ星』が年数回企画する発達に配慮を必要とする子育てをしている方対象の会にも必ず参加してくださっている。こういった3人の子どもさんを授かり、歩まれてきた経験は、今、まさにその真っ只中にある保護者さんにとって何よりも励みになり、支えられることかと思う。この園の役に立つならと思っ、くださるお母さんのお気持ちに本当に感謝しかない。

このご家族からは自分のお子さんがその子らしく、それぞれが生きていく為に、ご両親始めご親族で力を合わせ、周りの支援者も巻き込んで、この子たちが生まれ育ったこの地にしっかり根を張って、やがては自立できるよう先々のことまで考えられていることを学ばせていただいた。家族の揺るぎない『絆』を見させていた

だいたように思う。

7 個性豊かな子どもたち

立ち上げのきっかけになった3名以外のお子さんについても何名か紹介させていただきたいと思う。

先ず、先天性の遺伝子疾患で色素が全くない病気のE君がいる。この子は0歳児で入園してきた。3歳年上の兄と同じ保育園に通う予定だったがこの病気が分かった時入園できないということになり、障がい児も受け入れている当園にと、兄は転園という形で2人一緒の入園だった。

当園もこの病気のお子さんを保育することは初めてだったので先ずは1年更新で預かることになった。直射日光に当たることができず戸外に出るときは日焼け止めクリームを塗ったり、専用の眼鏡をかけたり、その他諸々完全防備する。白い髪の毛等見た目はちょっと違うE君だが赤ちゃんから同じクラスのお友達は何の抵抗もなく『おともだちのEくん』として受け入れた。1歳児クラスの時保育士が「おそとにくよ」と伝えると、ある子は日焼け止めクリームを持って「んー。んー。」とE君に塗るよう言う。またある子は眼鏡を見つけて指をさし、「んー。んー。」と眼鏡をE君にかけるよう言う。まだ言葉もままならない子達なのにE君にとって、それらが必要だとわかるのだ。自分たちが外に行く時に帽子を被ったり靴を履くのと同じ『当たり前』のことなのだ。初めてこの光景を目にした時、驚き、感動し、『インクルーシブ保育』の原点を目の当たりにしたような瞬間であった。みんななんてこともない『クラスメイト』だった。

2歳児クラスの時には視力が弱いことを担任が発見し、紙芝居や絵本を見る時はE君だけ他の子より前で見てもいいというルールを子どもたちと保育士で作るということもあった。年少、年中、年長と進むにつれこのE君の存在は当園が開園時から行事の度に園歌のように歌っていた金子みすゞさん作詞の『みんなちがってみんな

ない』を証明してくれるかのようで、個性豊かな子ども達の保育は学び多きものであり、職員の保育の幅を広げてくれた。

年中児になった時からは弱視ということで週1回盲学校の幼児部へ平行通園していた。そしていよいよ就学の準備が始まろうとする夏の終わりごろのことである。3歳年上のお兄ちゃんを通う公立の小学生へ進学するとご両親も私達も思っていた矢先のこと、ご両親が本人に最終確認をしたところ「僕は盲学校へ行きたい。」と話されたとのこと。運動神経抜群で知的にもとても賢いお子さんだったので浅はかにも、「え～もったいない！普通の小学校へ行けばいいのに。」と、とっさに言葉がでてしまった。ご両親がE君にその理由を聞いたところ「盲学校には僕のお友達がいるんだよ。」と言ったとのことだった。園以外のご近所や出かけた先々でE君が傷ついてしまうようなひどい言葉を浴びせかけられたことが一度や二度ではなかったと聞き胸が苦しくなった。それを耐え、自分が経験したいろいろなことを考え、この年齢で自分で自分の進路を決めた事を誇らしいと思うのと同時に、この気持ちを受け入れなければ申し訳ないと思った。『その子がその子らしく生きる支援』なんて言いながら、とっさに出たさっきの自分の言葉を消しゴムで消したいとすら思った。ただ、当の本人が『盲学校は楽しいよ。』という題名で書いた作文が賞を取り、新聞にも掲載されるほど充実した学校生活を送っていることが救いだった。

当学童は昭和町の委託の事業で他の市町村のお子さんはお迎えにも行けず、受け入れもお断りしている。しかしこのE君のご両親はこの園でできたお友達も大事にしてほしいからお2人で仕事の時間をやり繰りして学童に通っていただいている。本人は自分の障がいをしっかりと受け入れている。他の発達障がいの診断がついているお友達が小学校から帰ってきて、モヤモヤが収まらないでいると、「先生いいよ。俺に任せて。あっちで話してくるから。」等と言ってその子に寄り添う姿がある。自分がお友

達にしてもらったように自分も役に立ちたいと思つての行動かなあと思うがいずれにしても心強い存在であり、とても頼りになるE君である。

2人目は当学童の方針に賛同してくださったお母さんの希望で入所した定型発達のFちゃんである。この子は前述のC君より1年早い1歳児で当園に入園し、C君と同じ小学校の同じクラスで6年間過ごした子だ。当学童でも6年間一緒というお子さんで、C君にとっては唯一無二の存在であったに違いない。他の子は遠慮がちになるC君に堂々といけないことはいけないと伝えることができる唯一の子だった。他にも困っている子がいると全力で助けたり、落ち込んでいたりすると、さり気なく近くで寄り添ってくれるような子だった。年齢関係なく、障がいの有無も関係なく、誰とも合わせられるコミュニケーション能力の高い子であった。C君も職員に言われるより、Fちゃんに言われる方がすんなり受け入れられるようだった。園長先生がよく職員に「周りの子に力を借りる」とおっしゃられているがまさにその裏付けとなった。

そのFちゃんが小学校4年生の時、二分の1成人式で自分の将来の夢を発表する時に『ゆめくらぶ』の先生みたいになりたいです。』と言ってくれたとのこと。学童の職員が時には体も張って、毎日真剣に向き合ってきたことをちゃんと見ていてくれたのだなと思うと嬉しくて、職員で感動の涙をこぼしたことを思い出す。6年生の時に「私が卒業したら誰か代わりになってくれる子がいるのかな。」と最後まで『ゆめくらぶ』のことを大切に思ってくれていたことに胸が熱くなった。中学校入学の日、ちょっと大きめなセーラー服に身を包み来てくれたFちゃんが急に大人っぽくなってしまったなと思う反面、まだあどけなさも残る笑顔にほっとし、このままのあなたで成長して欲しいと心から願った。

8 自己肯定感を育む

当学童は『自己肯定感を育む』ということを常に実践してきた。園でも立ち上げの時から取

り組んできた。人はよく相手のマイナス面に目が行きがちである。しかし、園長先生は「この子の良いところを3つ挙げて。」と常におっしゃられ、すぐに3つが出てこないとその子の全てをみていないことになる。学童でも同じであり、一人ひとりの子の良さを見つけることが習慣になっていた。

また他にも取り組みのひとつとして、園長先生の提案でこども園の各クラスへその日の当番の子が『読み聞かせ』に行く、ということも行っている。当施設はどの部署にもテレビやDVD等一切置いていない。今、コロナ禍でお家時間が増え、ユーチューブやDVDを観て過ごす時間が増えてしまったとよく耳にする。脳等へのダメージからよくないとわかっていてもそうせざるを得ない状況であることも理解できる。だからこそ、当施設はどこにも置かないのだ。子どもたちは『読み聞かせ』が大好きである。一方読む方になると少し違うようだ。絵本選びから始まり自信の有無によっては沢山練習する子やひと通り目を通してだけで行く子や様々である。苦手とする子にこそ『自信』をつけてほしいから丁寧にその子の気持ちに寄り添って行ってきた。「今日は無理。明日する。」なんてこともある。それでも大丈夫。焦らせることなくその気になるよう声がけをする。そのまま行かないのではなく本人が『明日』と決めたなら明日まで待つ。とにかく初めての日はその子の緊張がこちらにまで伝わってきて、手に汗握るなんてこともあった。読み始めてもたどたどしく止まってしまうたり、内容と違った読み方をしてしまったりなんてこともある。それでも0歳児クラスから3・4・5歳児の縦割りクラスまでこのクラスも真剣なまなざしで集中して聞いている。保育士の『読み聞かせ』とはひと味違ってお兄さん、お姉さんの『読み聞かせ』は子どもたちの心に深く響くようである。そして読み終わると「ありがとうございました。また読んでくださいね。」とお礼の言葉をもらう。その目は輝き優しい笑顔で「どういたしまして。」と答える。そして、自分のクラスへ戻る姿は自

信に満ち溢れ確かな手応えを得ていることがよくわかる。

栄養士の力も大きい。長期休暇には学童の子が『クッキング』で全園児のおやつ作りをする。当施設はどこの部署も給食室職員の愛情こもった手作り給食に手作りおやつを食べることができる。野菜中心で栄養満点の給食は当園の自慢であり、子どもたちの健やかな『心と体』づくりに一役買ってくれている。また園内の夏祭りでは子ども達に輪投げ等のゲームの点つけ等のお手伝いをお願いしている。自分たちが役立っている、自分たちが必要とされているという経験がたくさんできる工夫を職員一丸となり取り組んでいる。

「どうせ俺なんか。」「私なんかいなくなればいいんでしょ！」などという思わず抱きしめてしまいたくなるような悲しい言葉を耳にする度に心が痛くなる。どの子もみんな幸せになるようこの世に生まれてきたのだから、一人ひとりがみんなかけがえのない『大切な存在』であることをひとりでも多くの子どもたちに伝え続けていきたい。これこそが自己肯定感を育むことに繋がると思うから。

9 おわりに

院長先生と園長先生の熱い思いで開設して13年。その子に、その家族に必要なならばと次々に各部署を開設してきた。人生の土台となる乳幼児期から、『人』としての心を育てる学童期までの大切な時期を共に過ごさせて頂くことに責任を感じ、襟を正す思いである。それぞれの専門性を活かしどんな子が生まれようと『ここに来れば何とかなる』と思う施設を目指す。職員にも得手不得手があり、「みんなちがってみんないい」のだ。お互い補い合って20代から70代までの40名の職員がスクラブを組んで日々奮闘している。この職場、この職員とご縁をいただいたことに感謝し、この世に生を受けた全ての子どもが幸せに『生まれてきて良かった』と思えるようこれからも歩み続ける。